

使う患者さんに思いを馳せて

持田製薬工場 生産部 中桐 健志さん

今日も出勤に使う車までダッシュする。小学生から高校生まではサッカー、大学時代から今もフットサルを楽しむ中桐健志さん(24歳)。フットワークは軽い。ダッシュは意識して行っているという。「調子よく仕事ができますように、そんなゲン担ぎみたいなものです」と笑う。

ゲン担ぎ、というのも、ちょっとしたミスが製品の品質に影響を及ぼす仕事を担当しているためかもしれない。もちろんゲン担ぎに頼っているわけではない。現場でのスキルアップ、そして自宅でも「生産士」の取得に向けて勉強に余念がない。

中桐さんは、富山医科薬科大学(現富山大学)大学院薬学研究科薬科学専攻の修士課程を修了し、2005年4月に持田製薬工場(栃木県大田原市)に入社。生産部で、注射剤、外用剤の製造を行う「製剤Ⅱ」に所属する。特に注射剤は、確実な無菌性の保証が求められ、原料の扱いにも細心の注意が求められる。

その中で中桐さんは、全注射剤の製造のスタート地点となる秤量・調製作業を担当する。作業は常に先輩のチェックを受けるとはいえ「ここでミスをしたら、出荷できなくなってしまう」と、緊張の連続だ。

工場では経口剤、外用剤に、04年10月からは注射剤の製造が加わった。製造設備は「世界で最も厳しい欧米の基準に10年後、20年後



世界基準の注射剤棟を持つ持田製薬工場

でも適合できる品質水準」をうたうほどで、工程の自動化を推進して人的な操作を最小限にし、汚染を徹底的に防ぐための工夫は施されている。

それでも、良質の薬剤の製造には人の手が不可欠というのが実感だという。「ちょっとした原料や環境の変化で、機械は違ったモノを作ってしまうおそれがある。そこを人間が管理することで、良い製品が作られる。入社して分かったことです」。秤量・調製にも、原料の投入、計量、機械のボタン操作は人が行う。緊張の瞬間だ。実際、別の原料を投入しそうになって、先輩から止められたことも。

そんな中で、学んだ薬学はどうか生かせるのか。

「例えば調製するにも、用いる原料がどういう目的で、どういう作用をするか分かった上で行える。その点は他の人よりは有利だと思っています」。同社事務所長の浅原茂雄さんも「薬学の知識を持って現場で製造する人がいることは理想的」と説明する。

薬学出身者の工場勤務は業界でも少ないといわれる。所属する「製剤Ⅱ」は約10人(パート除く)で、薬学出身者は彼ひとり。

05年4月施行の改正薬事法で、品質規制が厳しくなった。世界的にも、特にFDAの呼びかけで、品質保証・確保は嚴格化の方向にある。薬学の専門知識に対する需要は確実に出てきている。

中桐さんは、学生時代に病院実習など臨床現場も経験したが、研究職や技術系の職場の方が肌に合っていると、今の会社を選んだ。とはいえ、「自分の作っている薬は患者さんが使う。安心して使っていただけるよう、常に意識しています」

通常、朝8時半までには出社し、無



最初は配管の多さ、複雑さに圧倒された(調製現場にて)

菌を保証するため、手袋に帽子にマスク、白い無菌服に身を固め、午前中は秤量・調製作業。午後は製造工程の記録、微粒子や付着菌などの状態を調べる環境モニタリング作業、最後に設備の滅菌作業など翌日の工程を準備する。5時半には終業するが、残業も週の半分くらいはあるという。社内に作ったフットサルチームの休日練習、平日週1~2回の別チームでの練習で、仕事の緊張を解く。

製造の準備、設備のセットを任せられるところまで来た。これからについては「まず秤量・調製作業が一人前になりたい。そして注射剤の他の工程、他の薬剤の工程も経験して、一連の現場の作業を一通り自分のものにできれば、現場を知った形で全体を見られる、品質管理など工場全体を管理できるようになりたい」

患者さんへの貢献を胸に、一流の仕事人へと走り始めている。

職場探訪 <製薬企業>

ドラッグ業界 調剤報酬額No.1

セガミメディクスはドラッグストア及び調剤薬局を310店舗展開する薬局チェーンです。大病院の門前薬局を含む43の調剤薬局を持ち、年間の処方箋応需枚数は120万枚を超え、ドラッグストア業界では、調剤報酬額第1位を記録(2005年)。お客様や患者様の立場に立った丁寧なアドバイスを徹底し「かかりつけ薬局」をめざしています。

薬学生 募集中!



詳しくはホームページをご覧ください
<http://www.segami.co.jp>

セガミメディクス株式会社
大阪府中央区南船場2-7-30

フリーダイヤル:0120-999-041
E-mail:y-ueno@segami.co.jp